

〔伊呂波字類抄動物〕鴉ツキ亦タウ 桃花鳥ツキ 紅鶴同 鶴同俗用之、

〔碩鼠漫筆五〕稻負鳥考○略中

按に鴉は字書どもに見えず、恐らくは鴉を鶴に譯り、再び鴉に譯れるなるべし。鶴は字彙に鳥老切、鳥名、龍龕手鑒に鶴正、鳥老切、鳥名也、鶴或作と見えて、實は鴉とも決めがたし。太字はもし鴉の音か、或は豆岐を訛れるにも有べし。鴉は今本玉篇を見るに、鴉丁亥切、又作亥切云々、又竹交切とありて、鴉字を作りたれど、宋本爾雅に、鴉鶴剖葦と見えたれば、鴉に作れるも譯りならじ。龍龕手鑒はた鴉と見えたり、但爾雅の郭璞註に、好剖葦皮食其中蟲、因名云江東呼蘆虎似雀青斑長尾とあれば、こは鷦鷯サ、にて鴉には當らず、紅鶴は所謂朱鷺にて、是はた鴉とせしは違へり。本草綱目卷四十七、水禽類鶴の註に見えたり、桃花鳥は所出詳かならぬど、鷦鷯を桃雀ともいふ事、本草綱目卷四十八、原禽類に見えたれば、是も夫等よりまぎれたる名ならん、但安寧天皇紀、諸陵式等に、桃花鳥田、垂仁宣化兩天皇紀に、桃花鳥坂とあるは、古事記中巻の衝田、神武天皇紀の築坂と同じければ、これを鴉としたる事も、いと古くよりのならひと見えたり、鵠鰐鴉鴉は實に同じがるべし。玉篇に、鴉布老切、鴉性不止樹鴉同上、集韻に、鵠鰐鴉鴉、說文鳥也、肉出尺截、或作鰐鴉亦書作鴉、字彙に、鴉博考切、鳥名似鷹而大無後趾など見え、本草も水禽類に載たれば、是ぞよく都岐には當れる、鴉は鴉鳩にて、鳩にて、鳩類なれば、こは誤なる事いふまでもなし、鶴は玉篇に、莫侯切、鶴母、卽鶴也、郭璞云、青州呼鶴母とあれば、鶴ならん事慥なるを、其字體鶴に似たれば、おのづから譯れるなるべし。

〔東雅十七鳥〕桃花鳥ツキ 日本紀に桃花鳥讀てツキと云ひけり、倭名抄には玉篇を引て鴉はツキ赤喙自呼之鳥也、楊氏漢語抄の紅鶴名上に同じ、俗に用鶴字、今按所出並未詳と註せり、鴉の字爾雅に鴉鶴といふ名は見えたれど、此にしてツキといふものとは見えず、○註 楊氏が云ひし紅鶴